慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	労働価値説に対するベルンシュタインの一批評
Sub Title	
Author	金原, 賢之助
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.10 (1923. 12) ,p.1779(169)- 1790(180)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19231214-0169

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜錄

勞働價値說に對するベルンシュタインの一批評

金原賢之助

一

吾人の此小篇は、『社會主義を勞働價値の理論即リカードオによつて建設され而してマルクスによつて更に發展せられた價値學說より演繹することは、社會主義を自然法的見解より演繹すること、密接なる關係に立つものである』との立場に在るエドアード・ベルンシュタインが、此價値學說は科學的社會主義に於いて如何なる意義を有するかと云ふ問題に對して有する見解の大要を述べんとするものである。

姑く彼に從へば、『カール・マルクスは如何なる意義ある認識を以て經濟學に貢獻したかを問ふ人があるならば、彼が多くの人々から聞き得る所は、其は正に商品の價値を定むるものはそれに費された勞働あるのみと主張する價値學說であると云ふことであらう。けれどもマルクスが其大著『資本論』に於いて任務となした所のものは、勞働の生産物は勞働者に屬する、蓋商品の價値を決定するものは勞働であるからであると云ふことを立證せんとしたことではなかつた。寧ろ、近代資本主義的經濟の運動の法則を認識し之を確立せんと努めたことである。勿論之が爲に彼は勞働價値學說を用ひたが、それは此學說が、彼にとつて、資本主義的經濟組織に於いて起る階級闘爭の原因たる餘剩價値に關する學說の基礎であるからである』。(Der Sozialismus einst und jetzt, S. 25)

『マルクスの理論に從へば、餘剰價値が資本主義的社會の樞軸である。併し餘剰價値を了解せんが爲には、先第一に價値とは何であるかを知らなければならない。

マルクスに依れば近代社會に於ては、商品の價値は其れに費された社會的に必要な勞働から成立するものであり、其勞働は時間によつて測定せらるゝものである。併し此價値の尺度を立てるに當つては、幾多の抽象と還元とが必要である。第一に純粹の交換價値が、發見されなければならぬ、即個々の商品の特殊の使用價値から抽象されなければならぬ。次に――一般的に或は抽象的に人間の勞働の概念を構成する場合には――個々の種類の勞働の有する特殊の性質から抽象されなければならぬ。（より高度の或は複雜した勞働を單純な若しくは抽象的の勞働に還元すること）茲に於いて、勞働價値の尺度としての、社會的に必要な勞働時間を得んが爲には、個々の勞働者の勤勉、能力、準備に於ける相違から抽象されなければならぬ。而して更に、價値の市場價値即價格への變化が問題となるや、それ〳〵各個の商品に必要とせられた社會的に必要なる勞働時間から抽象されなければならぬ。けれども斯樣にして得られた勞働價値はもう一度抽象を必要とする。發達せる資本主義的社會に於ては、商品はそれの個々の價値に從つて賣られるのではない。それの生産價格換言すれば實際の費用價格に比例的平均利潤率を加へたもので賣られるのである。其平均利潤率の程度は社會的生産の價値全體の、生産交換等に費された人間の勞働力の賃銀全體に對する、割合によつて決定せられる、其際地代は其全體の價値から差引かれなければならぬし、又資本が工業資本、商業資本及銀行資本に分配されてゐることも、勘定に入れられなければならぬ。

「斯くの如くして價値は、個々の商品又は個々の種類の商品が考察さるゝ限り、全く測定することが出來なくなり、純粹な思索上の概念となる。併し之等の事情の下に於て、餘剰價値は何うなるであらうか。此餘剰價値は、マルクス說に從ふと、商品の勞働價値と其商品の生産に勞働者が費した勞働力に對する支拂との間の相違から成立するのである。故に、勞働價値が單に思索的公式或は科學的假說としてのみ認めらるゝを得る時に於いては、餘剰價値は愈々空虛な公式即假說に基礎を置く所の公式となるだらうと云ふことは明白である。』（Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, S. 72-3）

II

然るにエンゲルスに依れば勞働價値は實在すると云ふのである。即『エンゲルスは、一八九五――六年の〝Neue Zeit〟に發表せられた彼の遺稿に於て、其過程を歷史的に考察して問題を解決すべきことを指摘した。そこに從ふと、此價値法則は直接現實に行はれたことがあるものであつて、資本主義經濟に先立てる商品交換の時代に於ては商品交換を實際直接に支配したのである。其處で生産手段が生産者自身に屬してゐる間は、原始團體が其生産物の餘剰を交換するとか或は自足經濟の農夫及手工業者が其生産物を市場に齎らすことがあるとせんに、此場合に其價格が歸向せんとするは之等の生産物の勞働價値である。併しながら資本が實際の生産者と消費者との間に入り込んで來ると、勞働價値は益々表面から姿をかくして了ひ、而して生産價格が前に現はれて來る。前述の抽象とは、歷史上に起つたことがあり而して今日も尙は其作

用が殘つてゐて一定の場合と形式を以て實際繰返さるゝ所の出來事を、思索の上に於いて反覆することである。勞働價値は、假令最早直接には價格作用を支配しないとは言へ、依然として實在するのである。

エンゲルスは、資本論第三卷の或章句と關係せしめ、經濟史の手を借りて之を根本的に立證せんと試みてゐる。けれども彼は利潤率の成立と發達とは立派に說明したが、價値の問題を論じてゐる處では强き證據力が其論文には明かに缺けてゐる。エンゲルスの說明に從へば、マルクスの價値法則は、商品としての生產物交換の時代の當初から（バビロン、エヂプト等に於て）資本主義的生產の成立に至るまで五千乃至七千年の間、經濟的法則として一般に支配して來た筈である。此見解に對しては旣に Parvus が同卷の „Neue Zeit“ に於いて、生產者の勞働時間に基いた一般的交換價値の形成を、妨ぐる一團の事實（封建的諸關係、田舍に於ける未分化經濟、ギルド其他の獨占）を指示して以て、或決定的の反對論を主張した。勞働價値に基礎を置いた交換は、交換の爲の生產が經濟單位の副部門即剩餘勞働等の利用である間は、又其生產が交換する生產者によつて全く異つた條件の下に行はれる間は、一般的原則となることが出來ないのは極めて明かである。交換價値を形成する勞働の問題及從つて生ずる價値及餘剩價値の問題は斯る經濟狀態に於ては、今日程明瞭でないのである。」(a. a. O. s. 74-5)

併し其時代に於いて今日より明瞭に表はれてゐたものは、餘剩勞働の事實であつた。古代及中世に於いて、餘剩勞働が爲された場合に——當時は其餘剩勞働の上に如何なる種類の欺瞞も行はれなかつたから——其は何等の價値概念によつても曖昧にされなかつた。奴隸は、交換の爲に生產しなければならぬ場合には、純然たる餘剩勞働の機械であつた體僕（Der Leibeigene）及隸農（Der Hörige）は賦役現品の上納或は十一稅の如き公然の形式に於て餘剩勞働を行つた。たゞかの時代の富豪には、彼等の富をそれ自身の勞働の結果として表はすと云ふことが、全く思ひ浮ばなかつたのである。マヌファクトゥールの時代の初期に成立した所の（交換）價値（此價値は其時代に至つて始めて一般的となつた）の尺度としての勞働に關する理論は確かに富の唯一の生產者としての勞働と云ふ概念に關係を有して居り、尙又價値を全く具體的に解釋してゐるが、併しそれと同時に餘剩勞働の解釋を明かならしむるよりは混亂せしむることにより多く貢獻してゐるのである。其後アダム・スミスが、此理論に基いて、勞働價値から派生したものとしての利潤と地代を、如何に說明したか、リカードオが如何に此思想を完成したか、又社會主義者が如何に之をブルジョワ經濟學に對して振り向けたかと云ふことは、吾人は之をマルクス自身から學ぶことが出來る。(a. a. O. s. 75)

三

けれども『スミスに在つては旣に、勞働價値は一般に行渡つてゐる事實の抽象と解せられてゐる。スミスに從へばそれの完全な事實なるものは、たゞ資本の集積及土地の擅有に先立てる「初期の未發達の社會狀態に於いて」並に未發達の諸產業に於いてのみ存するのである。之に反して資本主義的世界に於いては、スミスにとつて、勞働若しくは勞銀と共に利潤及地代は價値の構成要素である、而して勞働價値はたゞ、勞働の生產物の分配言ひ換へると餘剩勞働の事實を明かにするが爲の「概念」としてスミスに役立つに

過ぎないのである。』

所がベルンシュタインの觀る所を以てすれば『マルクスの體系に於いても、其れは原理に於いては相違ない』のである。たゞ『マルクスは、勞働價値の概念を非常に嚴格に併し又非常に抽象的に解したが、此概念をスミスよりも遙かに固く保持した』のである。而してベルンシュタインもマルクス學徒と共に『其體系の最も根本的重要の點は「社會的に必要なる勞働時間」と云ふ勞働價値の屬性が、唯夫々の商品の生産方法にのみ關係するか或は又同時に之等の商品の生産額の其實際の需要額に對する割合にも關係するか否かと云ふ烈しく論議せられた問題に存する』と尙ほ思つてゐた間に『マルクスの机上には既に或解答が準備されてゐた。その解答は、他のものと同樣に此問題にも全く違つた性質を與へ又之を他の範圍他の方面に押し進めたのである。

各個の商品又は各種の商品の價値は、商品が其生産價格即生産費に利潤率を加へたもので賣られるからして、今や全く第二義的のものとなる。第一の地位を占むるものは、社會の全生産の價値及此價値が勞働階級の賃銀の總額を超過する餘剰即個々のではなくて全社會の餘剰價値である。勞働者の全部が、一定の時期に於いて、其手に收められた分前以上に生産する所のものは社會的餘剰價値を形成するのである。即個々の資本家が、彼等によつて經濟的に用ひられた資本の高に從ひ略々同一の割合を以て分配に與る所の社會的生産の餘剰價値を形成するのである。けれども此餘剰生産物は唯、全生産と全需要或は市場の購買力との間の割合に從つてのみ實現せらるゝのである。此見地から、言ひ換へると生産を全體として觀ると、個々の種類の商品の價値は、市場即購買者として觀察された社會が其時々に購求し得る高にまで其商品を、普通の生産條件の下に於いて、生産するに必要なる勞働時間によつて、決定せらるゝのである。所が此所に觀察されたやうな商品に對しては、正に其時々の社會の需要の尺度なるものは實際存在しないのである。』斯く觀じ來れば、斯くの如き價値も亦『純粹なる思索上の事實であつて Gossen, Jevons, Böhm-Bawerk 流の限界效用の價値と異らないのである。現實の關係が兩者の基礎となつてゐるが、併し兩者は抽象の上に建てられたものである。

斯くの如き抽象は、複雜な現象の觀察には、自然免れ難き所であるが、それが如何なる點まで許容せらるべきかは、全く研究の目的を對象に依存するのである。元來マルクスは、商品は結局單に或分量の人間勞働の具體化されたものに過ぎぬと云ふ位の程度に於いては、商品の特性から抽象することを認めてゐるが、正にそれは、ボエム、ジエボンヌ學派に於いて效用以外の商品の總ての特性から抽象するのは自由であると、全く同一である。併し此抽象は兩者とも唯論證の限られる目的に對してのみ許さるべきであり、而して其抽象に基いて發見された命題は限られた範圍内に於いてのみ其價値を要求し得るに過ぎないのである。』(a. a. O. s. 76-8)

四

一定種類の商品の其時々の總需要に對しては正確な標準がないことは、既に述べた所であるが、併し『實際の經驗は或期間をとつてみると、總ての商品の需要と供給とは略々相平均するものであることを示してゐる。更に實際の經驗は、商品の生産と分配とに活動的に參加するものは唯社會の一部分のみであり、他の部分には生産とは直接何等の關係なき勤勞に對して所得を享

くるか或は勞働に基かざる所得を獲てゐる所の人々が居ると云ふことを、示してゐる。斯くして生産上に用ひられた全勞働で、其生産に活動的に從事してゐるよりも遙かに多數の人々が生活してゐる。而して所得統計の吾人に示す所に依れば、生産上活動しない諸階級は、其上、總生産物の中、生産的に活動せる部分の人數に對する彼等の割合が決定するよりも、更に々々大なる部分を擅有してゐる。此生産的に活動せる人々の餘剩勞働は經驗によつて論證し得らるゝ經驗的事實であつて、何等演繹的證明を必要としないものである。マルクスの價値學說が正當であるか何うかと云ふ問題は、餘剩勞働の論證には全然無關係のことである。其は、此點に於いて、何等證明問題ではなく、唯分析と說明の手段に過ぎぬのである。

其處でマルクスが、商品生産を分析して個々の商品はそれの價値で賣られると推定したならば、其場合には、彼の以て全生産が現實に示してゐるとなす所の出來事を、假設された特殊の場合について說明するのである。其處で商品全體に對して費された勞働時間は、前述の意味に於いて、其商品の社會的價値である。假令此社會的價値は完全に實現されないとしても――何となれば商品の價値の下落は部分的生産過剩によつて常に惹起するからである――それは社會的餘剩價値又は餘剩生産物の事實に何等根本的影響を及ぼすものではない。その餘剩價値量の增加は、時には妨害せられ或は遲緩せしめらるゝこともあるが、併し如何なる近代的國家に於いてもそれが停止すると云ふことは全くない、況んや其分量が減退したと云ふことはない。餘剩生産物は到る所增加してゐる、けれども賃銀資本の增加に對する餘剩生産物增加の割合は、最も進歩した諸國に於いては低下しつゝある。

マルクスが商品全體の價値に關する既揭の公式を個々の商品に適用してゐると云ふ事實によつて、既に次の事が指示せらる、即餘剩價値の形成は、彼に於いては、生産の範圍殊に其餘剩價値を生産する所のものが工業賃銀勞働者である所の生産の範圍に於いて專ら起る。『即ちマルクスに從へば『近代の經濟生活に於ける他の總ての活動的要素は、生産の補助要因である。而してそれ等の補助要因は、例へば商人銀行家等或は其使用人として、工業的企業の爲に、然らざれば其企業に歸せらるゝ勞務を引受けて、其失を減少せしめ、以てそれだけ間接に餘剩價費値を高むるの助けとなるのである。卸賣商人等は、その使用人と共に、工業家に使はるゝ所の、形の變つた且階級の分化した番頭などに過ぎぬ、而して彼等の利潤は工業家の負擔すべき形の變つた且集中された失費である。之等の商人に傭れてゐる使用人は其商人の爲に餘剩價値を造り出すけれども、併し社會的餘剩價値は造り出さぬ。何となれば彼等の傭主の利潤は、彼等自身の俸給と共に、工業に於いて生産された餘剩價値の一部であるからである。唯此部分は、今觀たやうな職分の分岐以前に實際あつたよりは若しくは其分岐がない場合にある筈の部分よりは比較して少いと云ふだけである。此分岐は先づ生産の大規模の發達と工業資本の急速度の回轉を可能ならしめてゐる。一般の分業の如くに、其は工業資本の或は工業に直接從事せる勞働の生産力を高めてゐる』。以上、資本論第三卷に收めらるゝ商業資本及商業利潤の發展に關する節の要旨から、吾人の知り得る所は次の如くである。

『マルクスの體系に於いては、餘剩價値を創造

する勞働が如何に狹い限界を持つてゐるかと云ふことである。右に述べた職分は、他の職分と同樣に、其性質上近時の社會の本質に避けることの出來ないものである。彼等の形式は、變更の出來るものであるし、又恐らく變更されることは疑ひないが、併し彼等そのものは、若し人類がそれ〴〵封鎖された小さな經濟單位に分解して了へば、一部分は廢止され一部分は最少限度に減ぜられて了ふに違ひないけれども、人類が斯る經濟單位に分解しない以上は、依然として存在するであらう。それにも拘らず、現在の社會に對して尙ほ適用され得ると云ふ價値理論に於いて、之等の職分に歸せられた出費は總て直ちに餘剩價値から引き出されたもの〻如く見える、換言すれば一部分は失費一部分は搾取率の構成部分の如く見ゆるのである。』（a. a. O. S. 380）

五

然らば何故斯る觀を呈するかと云ふに、それはベルンシュタインに依れば、マルクスが『之等の職分の評價を爲すに當つて、專斷的の取扱が存する』からである。即『其場合には最早與へられた社會を考慮に置かないで、稍勝手氣儘な共同經濟の社會を假定して議論してある』からである。而して之が論者にとつては『價値學說に於ける總ての暗黑を啓くの鍵である。價値學說は此公式の助けを借りてのみ了解せらるゝのである。餘剩價値は、唯經濟全體を考慮することによつてのみ、測定し得らるゝ大さのものとして捕捉し得らるゝことは、吾人の既に承知してゐる所である。マルクスは彼の學說にとつて最も重要なる階級に關する章を完成するまでに至つてゐない。が其れに於いては、勞働價値は全く鍵即精神を附與された原子の如き思想上の形象に他ならないことが、最も明確に指示されたことであらう。――而も其鍵は、マルクスの巧妙な手に用ひられて、從來詳密に、合理的に且明確に論ぜられたことのない資本主義經濟の機制（カラクリ）を暴露し說明した、けれども或點以上に達すると、其作用を拒み、殆んどあらゆるマルクス學徒にとつて不幸なものとなつた所のものである。

勞働價値の理論は、就中、勞働價値が終始資本家に依る勞働搾取の尺度たるかの如くに見える點に於いて、誤謬に陷つてゐる。斯る誤謬に導いた理由は數あるが餘剩價値率を搾取率として表はすことなどは其一である。勞働價値が斯る尺度其ものとして誤つてゐることは、吾人が全體としての社會から論旨を進め、而して勞働賃銀の全額を他の所得の全額と對照した場合に於いてすら、既に前述した所からして明白である。價値說が、勞働の生產物の分配の正、不正に對して殆んど何等の規準を與ふるものでないことは、原子說が一の彫刻物の美醜に對して規準を與へないと、正に同一である。今日吾人は、非常に高い餘剩價値率を有する職業に、最良の地位に置かれた勞働者即『勞働の貴族階級』の人々を見ると同時に、非常に低い餘剩價値率を有する職業に最も卑賤な虐げられた勞働者を見出すのである。』

故に論者は續けて云ふ、『社會主義或は共產主義の科學的基礎は、賃銀勞働者が彼の勞働の生產物の價値全部を享得しないと云ふ丈の事實で支持されることは出來ない。エングルスは『哲學の貧困』の序文に於いて云つてゐるマルクスは實際彼の共產主義的要求の基礎を決して此上に（餘剩價値の上に）置いたことはない。而も吾人の眼前に日々益々起りつゝある資本主義的生產方法の必然的崩解の上に置いたのである」と。』

(a. a. O. S. 80-82)けれども、それは如何なる事情に基いてゞあるかと云ふ問題に對するベルシュタインの見解は別の機會に讓ることゝする。

（十二、十一、十四）

リカアドオ地代學說の先蹤（下）

津田誠一

九

姑らく Seligman の品騰に從へば、トッレンスも亦た穀物條令を環る經濟論爭の代表的なる闘士の一にして、且つ其純理經濟學の諸問題に寄與せる貢獻の當然至大の評價を博す可くして、然も往々斯界の認識を逸せる不遇なる論客の一たりしものである。其 "An Essay on the External Corn Trade; containing an inquiry into the general principles of that important branch of traffic; an examination of the exceptions to which these principles are liable; and a comparative statement of the effects which restrictions on importation and free intercourse are calculated to produce upon subsistence, agriculture, commerce, and revenue," 1815 は表題の甚だ冗長なるに拘らず、之を仔細に點檢する時は次の如き功績の顯著なるを認めねばならぬ。即「第一に彼れはマルサス及リカアドオに依賴せずして、地代の法則を發見した。第二に彼れはリカアドオに依り採用せられたる勞銀學說の發達を促した第三に彼れは通常リカアドオの創意に歸せらるゝ Comparative cost の法則を發見した。第四に、彼れはリカアドオの所論に離反し、且つ一層眞理に近接せる利潤學說の進展に資した」と (Seligman: On some neglected British Economists, Economic Journal, London, 1903) 而して自ら誇負する侃諤の論議の案外輕々に看過せられたる憂憤は、トッレンスの胸奥深く鬱積せる所と覺しく、リカアドオが其「經濟學原論」の初版に於て重要なる數項に關する彼れの先蹤に寸毫の言及する所無きを知るや、乃ち焦慮措く能はず直接書を寄せて這般の懈怠を難詰すると共に、更に前掲自著第三版（一八二六年）の序言に於ては、「一八一四年の脱稿に懸り翌年初頃に公刊したる本書の第一版に於て、著者は其マルサス及びリカアドオの甚だ適正なる且つ獨創的なる研究を知悉する以前に、既に最劣等級の耕作地と優良耕作地との間に於ける放資收益の較差が地代の形態を以て現前する事、並に吾人が生計資料を產出す可き費用を增大する時は、勞働生產物の一層多大の部分が勞銀として所要せられ、一層僅少の部分が利潤として殘存する所以を確證せり」とて、胸底不滿の一端を公然披瀝した (3rd ed. Preface, vii)。然らば將たして Seligman の評言は適確に正鵠を穿てる乎。トッレンスの自負に確固たる根柢の存する乎。

諸他の學說は姑らく問はず、今地代學說の關與する限りに於てトッレンスとリカアドオと兩家の異同を檢討するに、先づ彼等は穀物貿易の制限か收穫遞減作用の實現を促進し、地主の所得を偏頗に昂騰せしむる禍患を憂ふる點に於て其軌を一にする。即ちトッレンスは謂へらく、「穀物輸入に關する凡ゆる制限は素質の低劣なる土地の耕作を强要し、斯くして土壤の上に轉向せられたる勞働並に資本の特定部分より其最も有益なる用途を奪ふのみならず、更に穀物の自然價格を增進するに依り普ねく勞働並に資本の生產力を低下し、該國土の繁榮に對して一般